学会ニュース

日本地震工学会第10回年次大会（2013）開催報告

古屋　治
●大会実行委員長 東京都市大学

1．はじめに

2001年11月に研究発表・討論会(会場：日本学術会議)としてスタートした年次大会は、今年度で第10回を迎えた。今回は、2013年11月11日、12日の両日に渡り東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催した。開催期間を例年の3日間から2日間に短縮することでセッション構成を密にし、各セッション会場での参加者増によるディスカッションの活発化等を試みた。また、昨年同様、本学会の特徴の1つである分野横断型のセッション構成となるよう検討した。大会の論文発表数は221件、2日間を通じた参加者は、353名(会員245名、非会員28名、学生会員65名、学生非会員15名）であり盛況なうちに第10回の記念大会を終了することができた。

2．講演

講演は、6会場で並列開催され1日目16セッション、2日目18セッションの合計34セッションが行われた。

2．1　オーガナイズドセッション

オーガナイズドセッションは、調査研究委員会を中心に5件あり、初日2件、2日目3件として開催された。〔o-1：大災害時の避難問題(津波と洪水からの避難・対処行動および駅前滞留問題）（市古太郎：首都大)、o-2：強震動予測のための地盤構造評価法(山中浩明：東工大)、o-3：海域施設、陸域施設(海岸林を含む)、建築物の津波対策(松冨英夫：秋田大)、o-4：システム性能を考慮した産業施設諸機能の耐震性評価(高田一：横浜国大)、o-5：原子力施設の次世代地震PRA(柴田先生を迎えて）（東京都市大：村松健)〕。o-5では、セッションはじめに柴田碧先生から「地震工学とそれを支える地震学；地震学の責任」と題してご講演賜り、その後、関連OS、総合討論という学会としては新しいスタイルのセッション構成を試行したが、多くの参加者とともに大変有意義な討論ができ今後の大会の在り方の一つの方向性を示すことができた。

2．2　一般セッション

一般セッションは、表1に示すように震源特性、地盤震動、建築構造物、免震・制振・ヘルスモニタリングに多くの発表が集まった。特に、地盤震動、建築構造物は、両日に渡りセッションを配置する状況となった。なお、一部の会場では、会場設定に問題があり立ち見の状況となり参加された方々にはご迷惑をおかけした。また、2009年から開始した若手優秀論文発表賞の審査が今年度も継続して行われ、慎重な審査の結果、学生会員から3名、正会員から4名が受賞した。詳細は、学会ホームページに掲載されている。

表1　各分野の発表者数

分野		発表数	
自然現象	震源特性	16	62
	地下構造	0	
	地盤震動	35	
	地盤の液状化・斜面崩壊	11	
	津波・歴史地震・その他	0	
構造物	地中構造物およびダム	2	103
	杭および基礎構造	3	
	地盤と構造物の相互作用	2	
	土木構造物	5	
	建築構造物	59	
	機械設備系	3	
	免震・制振・ヘルスモニタリング	22	
	耐震補強	4	
	新しい構造・材料・その他	3	
社会問題	ライフライン	2	16
	緊急速報・災害情報	2	
	防災計画・リスクマネジメントおよび社会・経済問題	11	
	復興計画・その他	1	
被害調査／OS	最近の地震被害調査	2	40
	東日本大震災調査	5	
	o-1	5	
	o-2	10	
	o-3	4	
	o-4	8	
	o-5	6	

3．技術フェア

2007年から開始した技術フェアは、出展企業10社(近計システム、サイバネットシステム、ミツトヨ、アーク情報システム、白山工業、勝島製作所、ブリヂストン、オイレス工業、エニダイン、カヤバ システム マシナリー）により開催された。地震観測機器、解析ソフト、免制振装置まで多岐にわたる内容となり、参加者には大変興味深い展示内容であっただけでなく、大会収支運営面では大いに貢献いただく結果となった。また、今年度は、技術フェアの集客アップを狙ってスタンプラリーを開催し、景品としてiPad Air、ASUS MeMO Padを準備した結果大変好評

であった。

4．交流会

交流会は、72名の参加者を得て初日夕方に開催された。実行委員長の参加者、実行委員会・事務局、技術フェア出展企業への謝意と挨拶から始まり、安田進会長の挨拶と乾杯を経て、歓談となり、盛り上がったところで、今年度は、まず、技術フェア参加企業からの企業紹介、次に、沼田宗純氏(東大生研)、関一氏(電機大院)、小檜山雅之氏(慶大)、前川晃氏(原安システム研) より学生から社会人まで幅広い観点でのスピーチをいただいた。さらに、技術フェアスタンプラリーの当選者発表と流れ大いに盛り上がり、最後に、当麻純一副会長に締めていただき閉会した。

5．おわりに

本大会は、ここ数年の会場予約の経験が活かされ同じ階にセッション会場が集中することで各会場の移動がスムーズに行え大変好評であった反面、当初予定を変更し開催期間を2日間にしたことやプログラム開示の遅れ、当日配布物がCDのみになるなど参加者にご迷惑をおかけする反省点があった。

第10回と区切りの大会報告になるため、図1に第1回大会からの参加者数と論文数の推移をまとめた。概ね400名前後の参加者と250件程度の論文数で安定して推移していることが確認できるが、今後の益々の発展のためには、大会構成の在り方を再検討する時期と考える。次年度は、4年に1度の日本地震工学シンポジウムになることから、次回大会まで2年間の準備期間があり、この期間を有効に利用し、より有益な大会になるよう準備を進められたい。

最後に、大会に参加いただいた方々、また、運営に尽力いただいた実行委員会委員、ならびに技術フェアに出展いただいた企業には深く感謝申し上げるとともに、今後とも本大会が地震工学に関連する分野横断型の研究・技術交流の場として発展的に継承されることを切に願う。

【第10回年次大会実行委員会】

古屋治(実行委員長、東京都市大学)、清野純史(副委員長、京都大学)、五十田博(前年度実行委員長、京都大学)、松岡太一(会場、明治大学)、荒木康弘(会計、建築研究所)、高橋典之(論文編集、東北大学)、皆川佳祐(論文編集、埼玉工業大学)、千葉一樹(論文編集、東急建設)、中川貴文(交流会、国土交通省国土技術政策総合研究所)、丸山喜久(技術フェア、千葉大学)、中村いずみ(WEB、防災科学技術研究所)

写真１　柴田碧先生による講演の様子

写真２　一般セッション会場の様子

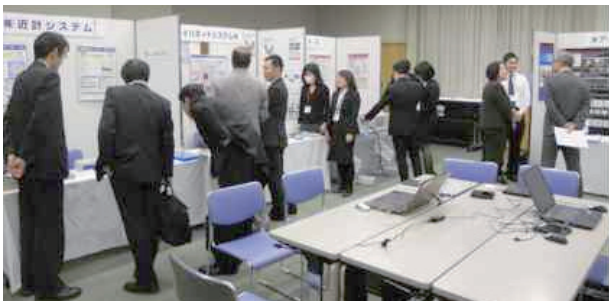

写真３　技術フェアの様子

写真４　懇親会の様子

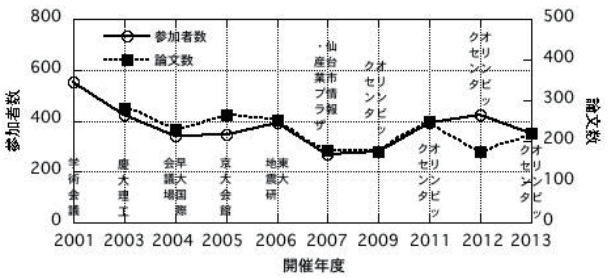

図１　参加者数と論文数の推移